

機関番号：14401  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2009～2010  
 課題番号：21730548  
 研究課題名（和文） 自我漏洩感に対する心理教育プログラムの開発と評価に関する研究  
 研究課題名（英文） Development and evaluation of the psycho-educational program for egorrhea symptoms  
 研究代表者  
 佐々木 淳（SASAKI JUN）  
 大阪大学・大学院人間科学研究科・講師  
 研究者番号：00506305

研究成果の概要（和文）：自我漏洩感の心理教育法の開発にむけて、その中心的な特徴である加害感と関係づけ的思考について、検討を行なった。Social Anxiety-Discomfort to Others Scale (SA-DOS)の日本語版とReferential Thinking Scale (REF)の日本語版を作成した。日本語版 SA-DOS は、 $\alpha$  係数と再検査信頼性の係数から、信頼性の高さが確認された。また、他の社会不安関連の尺度と有意な正の相関が見られたため、妥当性が確認された。日本語版 REF についても、 $\alpha$  係数と再検査信頼性の係数から、十分な信頼性が確認された。また、Schizotypy に関連する尺度と有意な正の相関がみられたため、妥当性が確認された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to investigate the feeling of offending others and referential thinking, which would be the central feature of egorrhea symptoms, toward the development of a psycho-educational program for egorrhea symptoms. The Japanese version of the Social Anxiety-Discomfort to Others Scale (SA-DOS) and the Referential Thinking Scale (REF) was developed. As the SA-DOS, alpha coefficients and test-retest correlation showed the sufficient reliability, and the association with the scales assessing social anxiety construct showed the sufficient validity. As the REF, alpha coefficients and test-retest correlation showed the sufficient reliability, and the association with the scales assessing schizotypy showed the sufficient validity.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：自我漏洩感, 心理教育, 対人恐怖症, 社交不安障害, SA-DOS, referential thinking, 認知行動療法

## 1. 研究開始当初の背景

## 研究の学術的背景

自我漏洩感とは、「感情や思考などの内面的情報が意図しないのに他者に伝わってしまう」と感じる心理的症状である。認知行動

療法 (Cognitive-Behavioral Therapy: 以下 CBT) の理論に基づいた研究としては、アセスメント技法の開発, 自我漏洩感の苦痛の発生に関する認知論的研究, 自我漏洩感の苦痛の維持要因を探る行動論的研究がおこなわ

れている。

アセスメント技法の開発について、佐々木・丹野 (2004) は、因子分析を用いて自我漏洩感が生じる状況を体系的に分類し、信頼性・妥当性の高い自我漏洩感状況尺度 (全 40 項目・5 下位尺度) を開発している。大学生を対象にこの尺度を回答させたところ、4 つの下位尺度で体験率が 60% を越えており、重篤な症状とされてきた自我漏洩感は、大学生にもみられることが明らかになった。

自我漏洩感の苦痛発生メカニズムについて、認知モデルの観点から、自我漏洩感是谁にもある程度生じるものであり、何らかの心理的要因によって苦痛が生じていることが示唆された。佐々木・丹野 (2005b) は、「他者にいやな感じを与えている」と信じている人が、自我漏洩感をネガティブに解釈してしまい、その結果苦痛を抱くことが明らかになった。

自我漏洩感の苦痛の持続メカニズムについて、佐々木 (2005) は自我漏洩感が生じた際の対処行動に着目し、気晴らしの対処行動を用いる人の苦痛度が持続しにくく、逆に、なぜ他者に自分の気持ちが伝わったのかを原因追及する対処行動を用いる人は苦痛度が持続しやすいことが明らかになった。

このような研究から、自我漏洩感に対する心理療法として何を行うのか、いわゆる治療ターゲットがある程度定まってきたと考えられる。CBT はセルフヘルプを志向する心理療法である (伊藤, 2005)。そのため、まず患者が自らの問題を自覚する必要がある、心理的問題と改善方法についての心理教育をはじめに行き動機づける場合が多い。しかし、自我漏洩感を感じることで自体に強い抵抗感と自我違和感が伴う (佐々木・丹野, 2005) ため、自我漏洩感についての心理教育にも細心の注意をはかる必要があろう。

## 2. 研究の目的

本研究は、自我漏洩感の心理教育プログラムを開発することを目的とする。自我漏洩感の心理教育プログラムを作成する際に、自我漏洩感の中心的な特徴に焦点を当てるのが欠かせない。その一端として、自我漏洩感体験の中で中心的な要素である関係づけ的思考と加害感についての知見を蓄積させたい。その知見をもとに、自我漏洩感を持つ人によりフィットするプログラムの開発につなげたい。

## 3. 研究の方法

平成 21 年度は、自我漏洩感の中心的な特徴の一つである、加害感 (人に不快感を与えていると感じる) を取り上げた。大学生 310 名に対し集団式の質問紙調査を行った。日本語版 SA-DOS (Rector, Kocovski, & Ryder,

2006) という尺度について 5 件法で回答を求めた。その他、Social Phobia Scale, Social Interaction Anxiety Scale (SPS/SIAS: Mattick & Clarke, 1998), Fear of Negative Evaluation Scale (FNE: Watson & Friend, 1969), Liebowitz Social Anxiety Scale (L-SAS: Liebowitz, 1987), Zung Self-rating Depression Scale (SDS: Zung, 1965), State-Trait Anxiety Inventory-State (STAI-S: Spielberger, Gorsuch, & Lushene, 1970), Taijin-kyofusho Scale (TKS: Kleinknecht et al., 1997) にも回答を求めた。SA-DOS, SPS, SIAS, TKS, LSAS を実施した 6 週間後に、SA-DOS, STAI, SDS に回答を求めた。また、他の群で、SA-DOS, SPS, SIAS, TKS, FNE を実施した。

平成 22 年度は、自我漏洩感の中心的な特徴として関連づけ的思考 (referential thinking) を取り上げた。一回目の調査において、200 名程度の大学生に対し集団式質問紙調査を実施した。Referential Thinking Scale (REF) 日本語版 (Lenzenweger, Bennett, & Lilienfeld, 1997) を 2 件法で回答を求めた。次に、その 4 週間後の 2 回目の調査において、REF 日本語版、日本語版 Schizotypal Personality Questionnaire (SPQ) (飯島・佐々木・坂東・浅井・毛利・丹野, 2010) から「関係念慮」、「感情の抑制」、「奇異な行動・外見」、自意識尺度 (菅原, 1984)、自己関係づけ尺度 (金子, 2000) に回答を求めた。

## 4. 研究成果

日本語版 SA-DOS は、 $\alpha$  係数と再検査信頼性の係数から、信頼性の高さが確認された。また、他の社会不安関連の尺度と有意な正の相関が見られたため、妥当性が確認された。加害感の測定に特化した測定尺度が完成したと考えられる。本研究は、Canadian Psychological Association (CPA) と日本パーソナリティ心理学会で発表を行い、現在学術雑誌に投稿中である。

また、日本語版 REF に関しても、 $\alpha$  係数と再検査信頼性の係数から、十分な信頼性が確認された。また、SPQ、自己関係づけ尺度などとの相関から、妥当性が確認された。また、アメリカによる referential thinking に関する調査 (Renzenweger et al., 1997) と比較して REF 尺度得点が有意に高かったものの、わずかな差であった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

①石垣琢磨・佐々木淳 (2011). 精神症状に対する認知行動療法. 統合失調症の心理社

会的治療最前線. Schizophrenia Frontier, 11, 4, 44-47. (査読無)

②佐々木淳・有光興記・金井嘉宏・守谷順 (2010). 社会不安障害の異常心理学と認知行動療法. 感情心理学研究, 18(1), 33-41. (査読有)

③飯島雄大・佐々木淳・坂東奈緒子・浅井智久・毛利伊吹・丹野義彦 (2010). 日本語版Schizotypal Personality Questionnaireの作成と統合失調型パーソナリティにおける因子構造の検討. 行動療法研究, 36(1), 29-41. (査読有)

④佐々木淳 (2009). Cultural competenceと心理臨床. 大阪大学大学院人間科学研究科心理教育相談室紀要, 15, 1-2. (査読無)

[学会発表] (計 11 件)

①和田奈緒子・伊藤直・塩崎麻里子・吉崎亜里香・佐々木淳・本岡寛子・平井啓・明智龍男 (2010). 乳がん患者への問題解決療法についてのプログラムの評価及び自身の変化についての評価に関する研究. 日本認知療法学会第 10 回大会 (名古屋市立大学) 発表論文集, 151. 2010. 9. 24.

②岡田紫甫・太田秀明・楠木重範・吉津紀久子・佐々木淳・平井啓 (2010). 小児がん患者の造血幹細胞移植ドナーとなった同胞のコーピングに関する研究. 日本サイコオンコロジー学会第 23 回大会 (名古屋市立大学) 発表論文集, 186. 2010. 9. 24

③福永泰士・佐々木淳 (2010). 精神状態に対する否定的イメージが精神的健康に与える影響: 「自分はどう病なのではないか」と感じる体験をもとに. 日本心理学会第 74 回大会 (大阪大学) 発表論文集, 329. 2010. 9. 20.

④川口ことみ・佐々木淳 (2010) 自己呈示欲求が対人ストレスコーピングに与える影響: 方略選択の認知を媒介する 3 つのモデルの比較. 日本心理学会第 74 回大会 (大阪大学) 発表論文集, 330. 2010. 9. 20

⑤Sasaki, J. (2010, June). Phenomenology, pathogenesis and related cultural factors on taijin-kyofusho in Japan. In Greenberg, J. (chairs), Cultural variations in social anxiety and taijin kyofusho. Symposium presented at 6th World Congress Behavioral and Cognitive Therapies (WCBCT2010), Boston, US. 2010. 6. 5.

⑥Wada, N., Kanai, N., Ito, N., Shiozaki, M., Yoshizaki, A., Sasaki, J., Motooka, H., and Hirai, K. (2010, June). Preliminary study of group problem-solving therapy for Japanese cancer patients in palliative care setting. Poster presented at 6th World Congress Behavioral and Cognitive Therapies (WCBCT2010), Boston, US. 2010. 6. 4.

⑦Mohri, I., & Sasaki, J. (2010, June). The influence of BIS/BAS (Behavioral Inhibition and Activation Systems) on taijin-kyofusho and social anxiety in Japanese undergraduates. Poster presented at 6th World Congress Behavioral and Cognitive Therapies (WCBCT2010), Boston, US. 2010. 6. 3.

⑧ 佐々木淳 (2009) Social Anxiety-Discomfort to Others Scale 日本語版作成の試み. 日本パーソナリティ心理学会第 18 回大会 (川崎医療福祉大学) 発表論文集, 160-161. 2009. 11. 29.

⑨Sasaki, J. (2009, June). Reliability and validity of the Japanese version of social anxiety: discomfort to others scale in a university sample. Poster presented at 70th Annual Convention of Canadian Psychological Association (CPA). 2009. 6. 12.

⑩岡田紫甫・平井啓・荒井弘和・和田奈緒子・佐々木淳・藤田綾子 (2009). 患者の持つ医師への信頼感の関連要因に関する検討. 日本心理学会第 73 回大会 (立命館大学) 発表論文集, 362. 2009. 8. 26.

⑪佐々木淳・坂本真士・森脇愛子 (2009). ネガティブ心性のメリット尺度作成の試み (2). 日本心理学会第 73 回大会 (立命館大学) 発表論文集, 442. 2009. 8. 26.

[図書] (計 5 件)

①佐々木淳 (2011). 大学生における自我漏洩感の心理学的研究: 認知行動療法の視点から. 風間書房.

②佐々木淳 (2011). 理論から実践へ. フォウラー, D.・ガレティ, P.・カイパー, E. / 石垣琢磨・丹野義彦 (監訳) 東京駒場CBT研究会 (訳) 統合失調症を理解し支援するための認知行動療法. 金剛出版, 106-118. Fowler, D., Garety, P., and Kuipers, E. (Eds.) (1999). Cognitive Behaviour Therapy for Psychosis: Theory and Practice.

Chichester, Wiley.

③佐々木淳 (2011). 統合失調症に対するCBTの効果研究の最新レビュー紹介. フォウラー, D.・ガレティ, P.・カイパーズ, E. / 石垣琢磨・丹野義彦 (監訳) 東京駒場CBT研究会 (訳) 統合失調症を理解し支援するための認知行動療法. 金剛出版, 236-237. Fowler, D., Garety, P., and Kuipers, E. (Eds.) (1999). Cognitive Behaviour Therapy for Psychosis: Theory and Practice. Chichester, Wiley.

④佐々木淳・丹野義彦 (2009). 心理療法. 丹野義彦・利島保 (編) 医療心理学を学ぶ人のために. 世界思想社, 192-200.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐々木 淳 (SASAKI JUN)

大阪大学・大学院人間科学研究科・講師

研究者番号 : 00506305

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし